

口頭発表「岡山県下の小学校での学校飼育動物の現状」

鈴木美有紀※ 秋山繁治※※



はじめに

平成11年、高等学校学習指導要領で、教科横断的な学習が可能な「総合的な学習の時間」が告示された。生徒が自ら学び自ら考える力や学び方やものの考え方などを身に付けさせ、問題を解決する資質や能力などを育むことを目的に誕生した。

本校では、「総合的な学習の時間」が実施される2002年度（中学校）、2003年度（高等学校）に先立ち、1998年度から学校設定科目として「国際情報」と「発展科目」の授業を教育課程に設定した。「国際情報」は、コンピュータとインターネットを使った情報教育の授業として、「発展科目」は、高校の学習範囲を超えた広範囲な内容のいくつかの講座を用意し、生徒自身が自由に選んで学習できる選択授業とした。当時、「コンピュータ導入は受験指導の邪魔になる」、「従来の教科の枠を超えた授業は冒険的過ぎる」という意見もあったが、「生きる力」をキーワードにした「平成の教育改革」が追い風となって設定することができた。その後、「総合的な学習の時間」の設定が義務付けられ、本校は、「国際情報」を「情報A」とし、「発展科目」を「総合的な学習の時間」とした。

今思えば、この「国際情報」と「発展科目」を教育課程として設定したことにより、新教育課程の「情報A」と「総合的な学習の時間」への切り替えもスムーズに行えたと考えている。そして、学校飼育動物の調査を継続して行うことも可能になった。

1 学校飼育動物の調査を始めた背景

本校で取り組んでいる学校飼育動物の調

査は、1999年度の「国際情報」という授業の中で生徒への課題としてスタートした。その後、「情報A」や総合的な学習の時間の「生命」で、調査や分析を継続し、現在に至っている。

調査内容を、学校飼育動物にしたきっかけは、当時、青少年の事件が多発しており、命を軽視することが問題になっていた状況下で、子どもたちに命の大切さを教えるための教材として、小学校で飼われている動物の役割を見直すことが目的だった。

しかし、学校飼育動物の調査を10年間実施してきた現在では、次のような新しい問題点も感じている。

- ① 高校生にとって小学校時代の飼育動物についての記憶がほとんどない状態で、意識されていない存在になってしまっている。
- ② ウサギの生き埋め事件に代表されるように、飼育について先生方の理解が乏しいのが現状で、赴任したばかりの若い先生に飼育の担当が押しつけられるような状況にある。
- ③ 飼育についての負担感が大きく、鳥インフルエンザなどを理由に飼育を止める傾向がでだしている。
- ④ ペットの殺処分など、動物の命が物のように扱われる傾向が強まっている。

生徒も、訪問調査をして、このような現状を知り、様々な感想を持っていることだろう。

しかし、生徒の出身小学校に限定した訪問による聞き取り調査だけでは、データとして全体像が見えてこないのが、より広域に詳細な調査が必要だと考えた。岡山県で学校飼育動物の現状を把握できる全県的な調査が今まで実施されていなかったこともあり、2008年に岡山県内の小学校を対象にしたアンケート調査を実施することにした。

自分の足で調査することと、広域に詳細な調査をすることで、より実態として把握できる資料が得られると判断した。

このようにして、所期の目的である「飼育動物の役割」や「飼育動物のより良い飼

育の仕方」などを、生徒たちの視点で再考してもらいたいと考えている。アニマルセラピーなどで心を癒す動物の役割が重要視されているように、幼少時から動物を愛して、庇いながら育てる体験は重要だと思う。また、小学校の風景に馴染むものとして歴史的に飼われてきた動物たちを本当の意味で役立てることが大切である。この調査が、飼育動物に関しての問題提起になることを期待している。

2 具体的な実施内容とその結果

(1) 出身小学校への訪問調査

調査項目は、動物の種類、飼育個体数、飼育環境、など。

1999年度の「国際情報」の生徒への課題としてスタートし、2007年度からは「情報A」の課題レポートとして実施。2007年度の報告レポートは125件、2008年度は101件であった。具体的な内容は本校のホームページで公開している。

学校飼育動物の調査結果を公開しているHP

学校飼育動物に関するアンケート (2009)

昨年、青少年が命を犠牲にすることが問題になっており、そうした状況下で、学校飼育動物が見直されています。幼少時から動物を愛して、庇いながら育てる体験の重要性も国も認識しています。しかし、岡山県では、全国的な学校飼育動物についての調査が実施されておらず、現状が把握できておりません。

そこで、まず学校の現状を知る必要があるということで、1999年から、総合的な学習の一環として、出身小学校の飼育動物の種類から着手し、次の段階として、データとして総合的に分析するために、県下の幼稚園(2009)、小学校(2008)、中学校(2008)にアンケート用紙を送付させていただきました。

このHPは、これまで生徒とともに行ってきた岡山県内の学校飼育動物の調査の結果を知っていただくために作成しました。不備も多いとは思いますが、学校教育に動物を利用する際の資料として役に立っていただければ幸いです。

<http://www.nd-seishin.ac.jp/breed/>

(2) 小学校飼育担当者へのアンケート調査

- ①飼育状況
- ②飼育をやめた動物
- ③ウサギの飼育
- ④動物の扱い

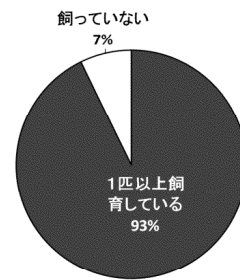
2008年2月から3月にかけて、岡山県内小学校435校にアンケート用紙を郵送。360校(83%)から回答を得た。

アンケートの作成、封筒入れ、データ整理及びデータの入力、生命科学コースの「総合的な学習の時間」『生命』の授業で行い、データ解析は、生命科学コース学校設定科目「生命科学課題研究」で、研究発表に直接関係した生徒が担当した。

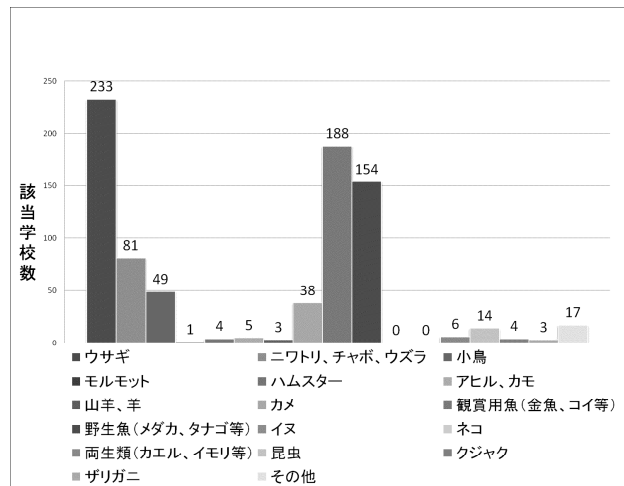
〔結果〕

①飼育状況

■小学校で動物を飼育しているか。



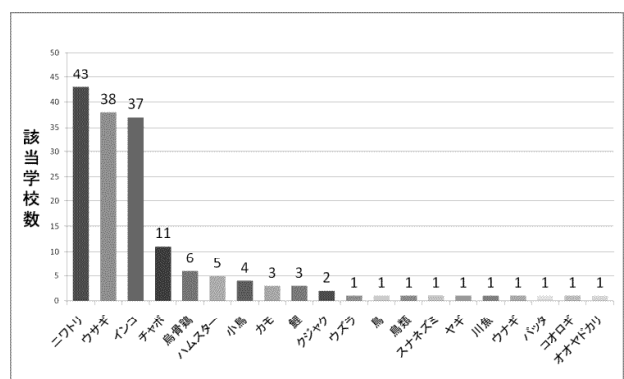
■飼育している動物は何か。



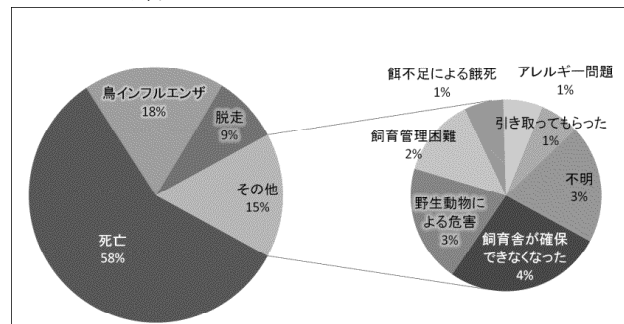
動物を飼っている学校は93%で、ウサギが最も多かった。次が観賞用魚で61.9%。ウサギ64.7%と僅差であった。

②飼育をやめた動物

■飼育をやめた動物は何か。



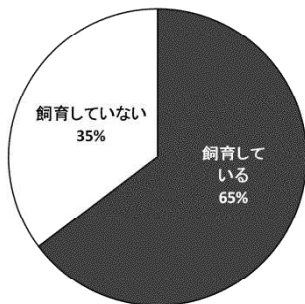
■なぜ飼育をやめたか。



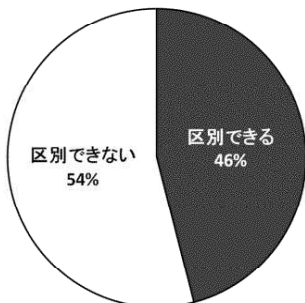
飼育をやめたのが最も多かったのはニワトリで，その他にもインコ，チャボなどの鳥類が目立っている．鳥類の飼育をやめた理由については，具体的に，鳥インフルエンザであると答えている学校もあった．

③ウサギの飼育

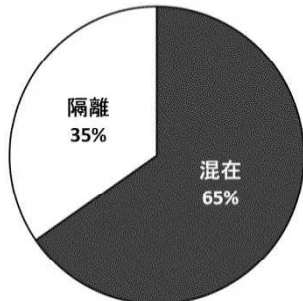
■ウサギを飼育しているか.



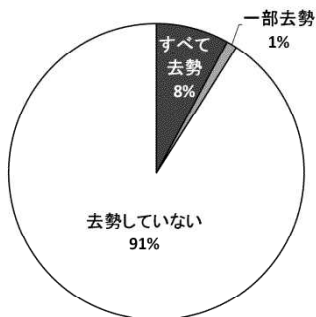
■ウサギのオスとメスを区別できるか.



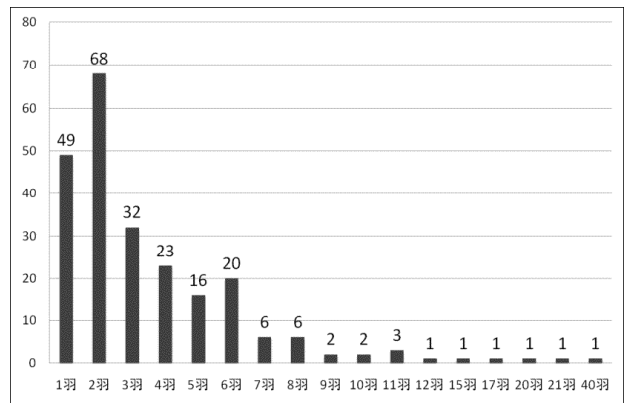
■オスメスの飼育空間はどのようになっているか.



■ウサギのオスは去勢しているか.



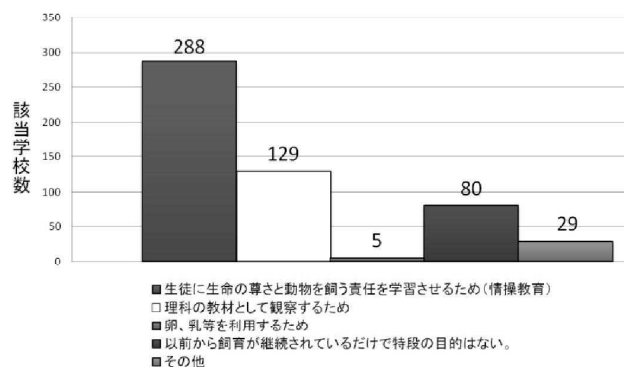
■ウサギの飼育数



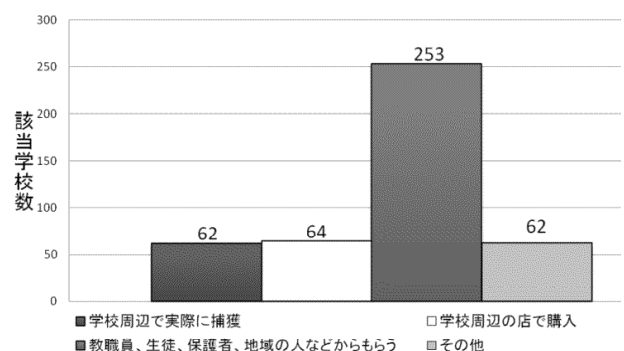
ウサギを飼育しているのはアンケートに回答した全学校の65%で，飼育担当者が雌雄を判別できない学校が半数を上回った．雌雄混在で飼育されている場合が多い．去勢率は低く91%が去勢していない．爆発的に増え，最多で40羽にもなっている場合もあった．

④動物の扱い

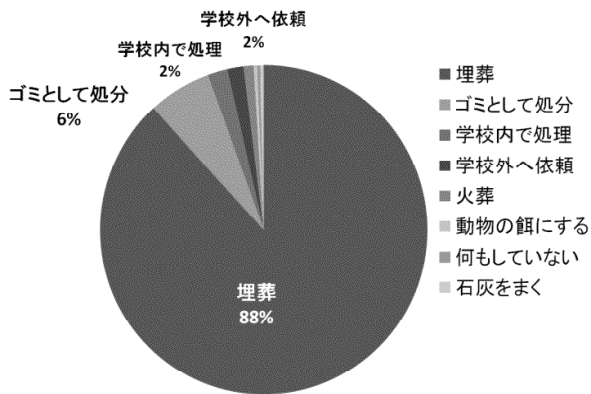
■飼育の目的は何か(複数回答可).



■飼育動物はどのように入手したか(複数回答可).

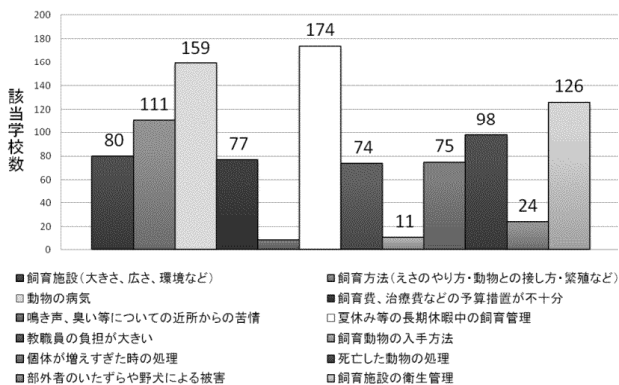


■動物が死んだらどうしているか。

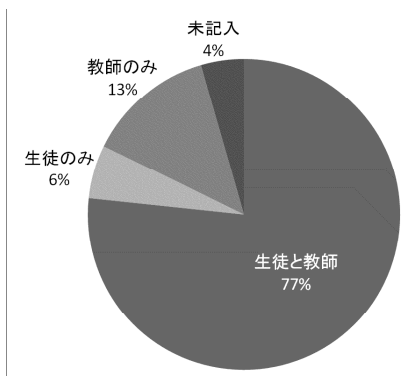


飼育目的は「生命の尊さと動物を飼う責任を学習させる」というものが圧倒的に多い。死んだ動物をゴミとして処分しているという学校も存在した。

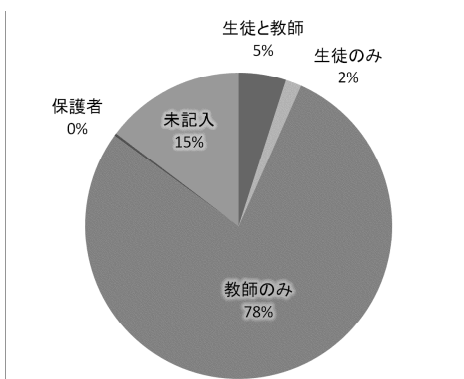
■飼育する上で困ったことは何か。



■平日の飼育担当者は誰か。

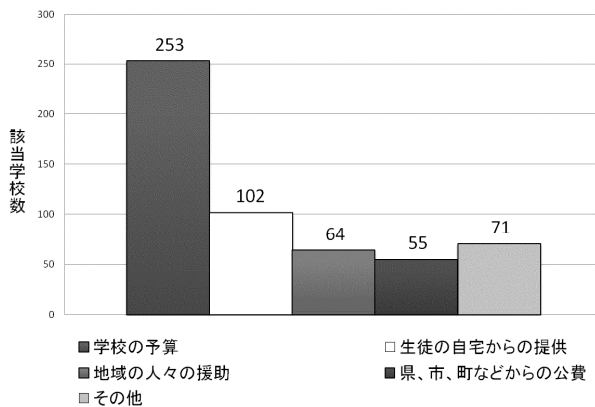


■休日の飼育担当者は誰か。

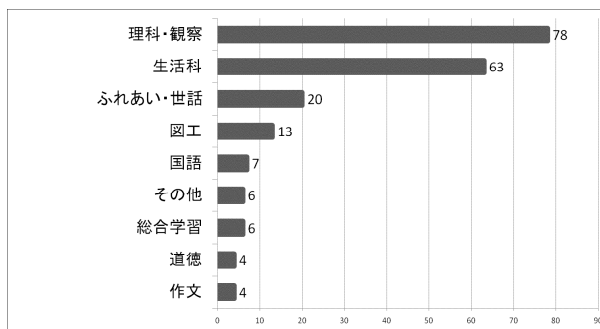


飼育上で困難だったことを尋ねたところ、最も多かったのは「長期休暇中の飼育管理」であった。平日と休日の飼育担当者をみると、平日は生徒と教師と一緒に世話をすることが多いが、休日になると教師のみで世話をしていることが多かった。

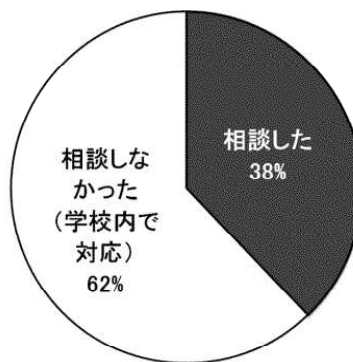
■飼育動物の餌代はどこから捻出しているか



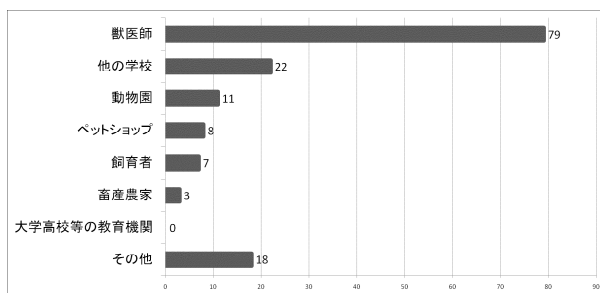
■授業ではどのような利用の仕方をしているか



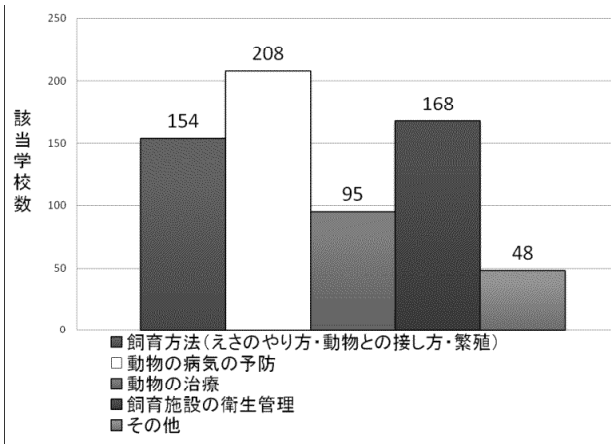
■飼育する上で困った場合、誰かに相談したか。



■相談相手は誰か。



■相談機関があったら何を相談するか。



相談機関があったら何を相談するかという問いに対し、動物の病気についてという回答が最も多かった。現状では、飼育で困っていても外部に相談しないで学校内で対処したという回答が58%で半数を上回っていた。

〔考察〕

最も多く飼育されているのはウサギだが、雌雄を区別できない学校が多く、避妊しないで雌雄を混在させて飼っている場合が多い。動物についての知識が教師でさえ理解が十分でない状態で飼っているのが、困難に直面する機会が多いことが想像される。ウサギは、避妊・去勢をして、飼育数を2・3匹に制限して飼えば、問題なく飼える動物である。

鳥インフルエンザの流行で鳥類の飼育を中止した学校があったが、これも知識がないまま、社会の情報に翻弄され、動物飼育にネガティブな状況の反映したものと考えられる。動物の病気について獣医に相談するなど、教師自身が、極端な誤解に対しての説明ができる知識を身につけることが必要である。

人間と同じように、動物も必ず死をむかえるが、大切に飼育した動物の死を児童たちにどのように伝えるかということも重要な教育テーマだと考えられる。ゴミとして処分している学校もあるが、「生命の尊さ」をどう教えるのかをもう一度考えてほしい。調査した高校生にとって、「ゴミとして処分」という記載に驚いた生徒は多い。ペットの殺処分も行われる社会なので、大人の判断として「死を見せない」ように考える視点もあるが、学校教育でどのように扱うかを再考する必要がある。

休日の飼育は現在、担当教師のみが行っ

ていることが多く、大きな負担になっている。保護者や地域住民の協力が得られるような状況が求められている。

(3)本校生徒へのアンケート調査

⑤小学校時代の飼育経験

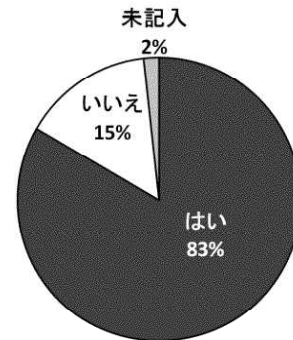
⑥本校での動物飼育経験について

文理コース70名，生命科学コース（本校で動物飼育を経験）44名，合計114名から回答を得た。生命科学コース学校設定科目「生命科学課題研究」で、研究発表に直接関係した生徒が担当した。

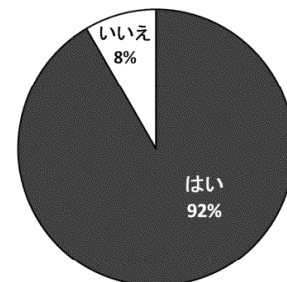
〔結果〕

⑤小学校での飼育経験

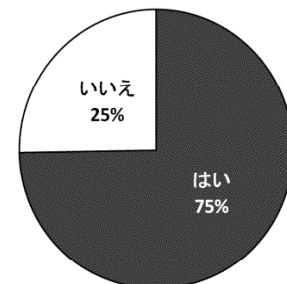
■ウサギの飼育経験があるか。



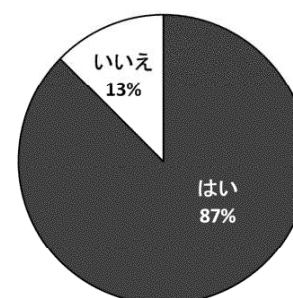
■触ったことがあるか。



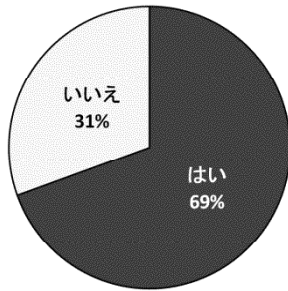
■抱いたことがあるか。



■餌をあげたことがあるか。

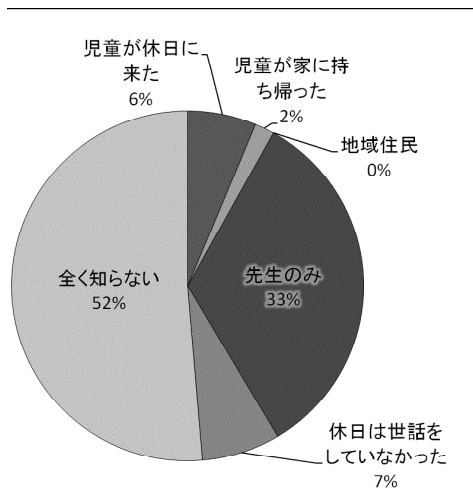


■ 小屋を掃除したことがあるか.



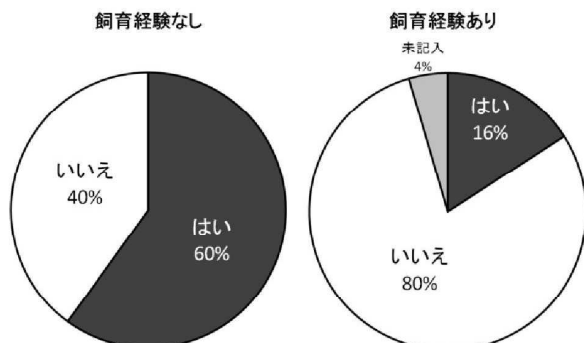
小学校のときにウサギの飼育経験がある生徒は83%で、そのうち餌をあげたことがあるのは87%、小屋の掃除をしたのは69%とかなり高い数値結果であった。しかし、同様に触ったことはあっても抱いた経験はない人も見られた。「触る」、「餌をあげる」という軽い接触はあっても、小屋の掃除をしたり抱いたりしたとより深い接触の経験は少なくなる。飼育経験があるとしながら、触れたことも餌をあげたこともないと回答した生徒もいた。

■ 休日の世話はだれがしていたのか.

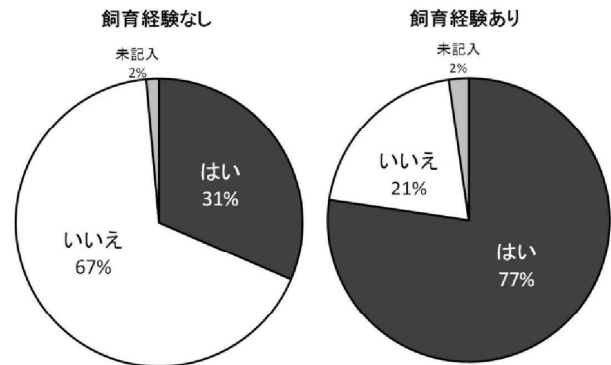


学校に飼育動物がいたと回答した人のうち、半数は休日の世話を誰がしていたか知らなかった。休日の飼育について、気にかけていることが少ないようだ。

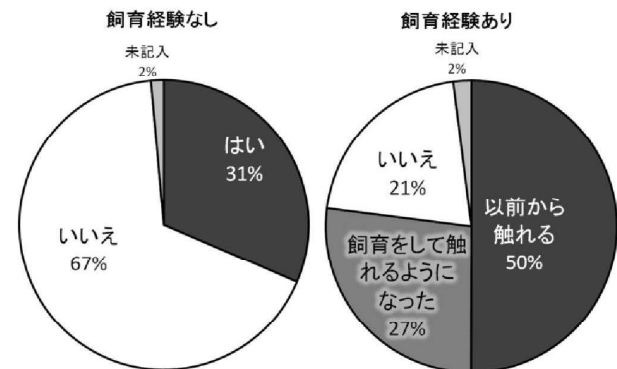
■ 両生類を気持ち悪いと感じるか.



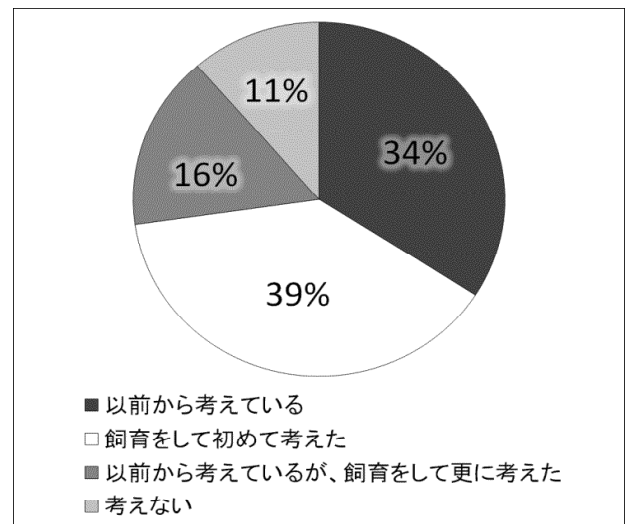
■ 両生類を「かわいい」と思ったことはあるか



■ 両生類に触れられるか.



■ 貴重種の重要さや、自然環境について考えるようになったか.



生命科学コースでは、高校1年で、放課後、両生類（サンショウウオ）の飼育を当番ですることになっている。文理コースの飼育経験がない生徒と両生類への意識について比較した。

「両生類を気持ち悪いと感じますか」という問いに対して、「飼育経験あり」と「飼育経験なし」ではっきりとした違いが表れた。「飼育経験あり」は、80%が気持ち悪

いと感じていない。

また、「両生類をかわいと思ったことはありますか」という問いにも、「飼育経験あり」は圧倒的に両生類をかわいと思ったことのある人が多い。同じく、「両生類に触れることができますか」に対しても、飼育によって慣れて触れることができるようになったと自分が変化したことを認める人も多かった。

〔考察〕

休日の世話の負担を想像できる生徒が少なく、結果として先生のみが世話をしていると思われる。このことは、高校生であっても、動物飼育をさせた土・日曜日の世話については最初は想像できないことと一致している。人間の都合で考える文化がしみ込んでいると考えられる。

飼育動物として哺乳類や鳥類が飼われる場合が多いが、飼育を経験することによって、両生類でも接触に慣れ、苦手意識がなくなり、かわいと思うようになると判断できる。また、その両生類が、希少種などに指定されている場合、自然環境に目をむけ、環境保護について考えるきっかけともなり得ることが判った。

3 今後の課題

小学校へのアンケート結果で様々な問題点を見出すことができた。この問題点が小学校より更に多くの動物と関わることを教育内容に盛り込んでいるだろう幼稚園ではどのような状況なのだろうと、2009年2月から3月に、岡山県内の幼稚園を対象にアンケートを実施している。現在この集計に取り組んでいる。

4 今後の調査

- ・岡山県内幼稚園のアンケート結果の集計
- ・5年後・10年後に、小学校に再度アンケート調査を行い、飼育頭数の変移等を見る。
- ・調査対象とする地域を限定し、より詳細なデータをとる。

5 最後に

岡山県下の83%の小学校にアンケートに応じただけで、学校飼育動物の現状をある程度理解するきっかけになる調査ができたと考えている。

中央教育審議会は、動物に触れる教育で「心の教育」を提言しているが、学校現場では、担当教員の知識不足、飼育経費の不足、飼育作業の負担などが原因となり、飼育を敬遠する流れを生み、鳥インフルエン

ザなどの社会問題と相まって、飼育動物を激減させる現状をつくっている。

また、出身小学校に出向いての調査では、卒業生として訪問した学校で、「見せることはできない」と拒否されたケースが、10年間の調査で初めて2008年に3件発生している。今の小学校が卒業生に警戒しなければならない状態にあるのか、飼育状況を見られたくないのか、理由は不明である。

今回のアンケート調査を実施するにあたり、アンケートの作成・送付のための封筒入れ・データ整理及びデータ入力・データ解析は、2006年に文部科学省のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けて誕生した「生命科学コース」の生徒が中心になって進めてきたものである。全国学校飼育動物研究会での発表も生命科学コース2年生の鈴木美有紀さんをお願いした。本校の教育における研究課題は、「生命科学コースの導入から出発する女性の科学分野での活躍を支援できる女子校での教育モデルの構築」である。女性の理系分野への進出が極端に少ない日本で、女子生徒の理系への進学を支援できるような教育を考えようというものである。しかしながら、単に科学技術を学ぶことを進めるのではなく、「生命」を大切に考えられる人間に育ててほしいということを願っている。大学への進学者にとって、「受験に関係ないものは必要ない」と考えられがちだが、人間にとってもっとも大切なものは何なのかを再考することが必要な時代になっているように考えている。

年に一回の獣医の先生に講師をお願いしている「学校飼育動物について」の授業で、「自分のペットの死と学校飼育動物の死とどちらが悲しいですか」という問いが生徒に投げかけられた。生徒からは「自分のペットが死んだときの方が悲しい」という答えが必ず帰ってくる。その理由は、共に過ごした時間が長いほど愛着が生まれ、大切なものになっていくのだという証明であると思う。人間の家族も学校時代の友達も、共に過ごした時間が長いと感じられることが大切なのだと思う。多くの学校飼育動物が大切にされ、子どもたちに命を大切にする気持ちを育む役割を果たすような存在になることを願いつつ、今後も研究を続けていきたいと考えている。

（聖心女子高等学校 *生徒 **教諭）

参考文献

2010年1月22日 季刊 セクシュアリティ1月号 (エイデル研究所) .No. 44. p60-65. 「生き物の観察から生命現象に感動する心と呼びもどす・アカハライモリを使った発生の観察」

2009年12月15日 理科の教育 (日本理科教育学会) 平成21年12月号通巻689号2009/Vo 1. 58. p22-25. 「実際に『触れること』が科学的思考を育てる」

2009年2月25日 生物工学 会誌第87巻第2号 (生物工学会) . p110
「女子校で有尾類と付き合って20年」

2008年8月25日 生物工学会誌 第86巻第8号 (生物工学会) . p415-416
「清心女子高等学校 生物部の歩み」

2005年8月15日 現代性教育研究月報 (日本性教育協会) . Vol. 23. No. 8. p1-5. 「総合的な学習の授業「生命」で生き方教育・「大切なもの」をどのように伝えるか」

